

巻 頭 言

早稲田大学 教授
CAUA 会長

後藤 滋樹

大学人の勤務時間について考察する。最近とみに注目を集めている有名企業における過労問題、さらに小中高校の教員の勤務実態の調査結果と同様に、大学における教職員の勤務状況には大いに問題がある。

エズラ・ヴォーゲル先生 (Ezra Feivel Vogel) は『ジャパン アズ ナンバーワン』の著者であり日本の事情に詳しい。彼は日本の大学に2つの弱点があるという。

1つには国際化が遅れていること。2つめは大学の教員が忙しすぎる。同様の指摘が日本の大学に勤務する複数の外国人教員から寄せられている。国際化は別途に論じるとして、ここでは大学の教職員が忙しい理由を考察する。

大学の教職員が多忙である原因は複数ある。よく「大学は教育と研究」と言う。

こう言った途端に二足の草鞋 (わらじ) を意味する。それに加えて最近新しい企画が実行に移される。その際に古い仕事を止めれば良いのだが、実際には新旧の仕事が併存する。これでは忙しくなるのは当たり前である。

さらに教職員も人間であるから共通の弱点がある。ノーベル経済学賞のダニエル・カーネマン先生 (Daniel Kahneman) は著書の中で「人間の直感は統計に劣る」と指摘している。良心的な教職員は自分の能力の限界まで社会的に貢献しようとする。これは美しいことには違いないが、あいにく人間は自分の能力を3割程度まで過大に評価するという。この弱点が厄介を招いてしまう。

新旧の仕事の併存も人間の弱点も、特に大学に限るわけではない。ただし企業であれば上役が仕事の様子を見て担当者を増員する。あるいは古い仕事を他に移管する。残業時間を管理するのは企業の責任である。大学を遠方から眺めれば百貨店のような組織に見えるのかもしれないが、実態は個人商店が軒を並べている商店街に近い。隣の店が火の車であっても助けが来ないかもしれない。

本誌の読者諸兄が大学の弱点に十分に留意されて、健康第一でお過ごしになられるようにと願っている。